



営農情報

第112号 令和3年10月4日

「あまおう」10月の管理

南筑後・久留米普及指導センター
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

花芽分化の状況

早期作型では、冷蔵庫入庫前（8月中旬）の気温が低く推移したため、花芽分化のそろいは全体的によかったが、冷蔵庫入庫10日前に硝酸態窒素濃度が高かった（500ppm以上）苗では分化の遅れが見られました。

また、9月上・中旬の最低気温が平年よりやや高く推移したため、普通作型の花芽分化は平年並み～やや遅い状況となりました。

定植状況

早期作型の定植は9月12～20日、普通作型の定植は9月23～26日を中心に実施されました。

土壌消毒

8月中旬の大雨により土壌消毒を実施できなかったところが多く見られました。次年度は、早い時期の土壌消毒が望まれます。

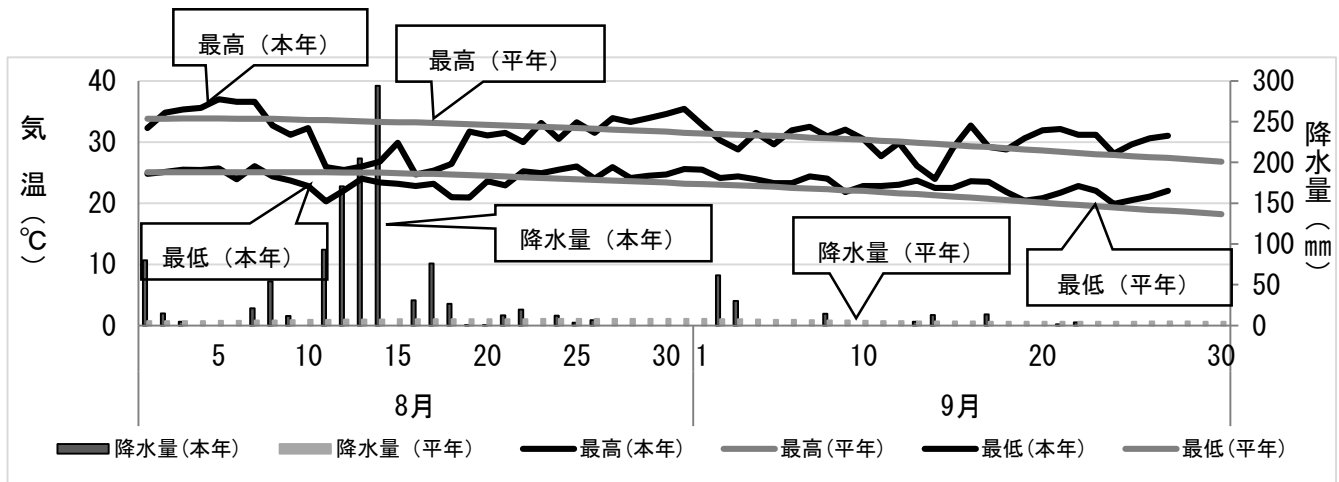


図1 気温及び降水量の推移（アメダス 久留米より）

【今後の気象予報】

〔九州北部地方の1か月予報〕

（予報期間：9月25日～10月24日 9月23日 福岡管区气象台発表）

向こう1か月の気温は高いでしょう。

向こう1か月の日照時間は平年並みか多く、降水量は平年並みか少ない見込みです。

平均気温 低い 10	平均気温 平年並 20	平均気温 高い 70
降水量 少ない 40	降水量 平年並 40	降水量 多い 20
日照時間 少ない 20	日照時間 平年並 40	日照時間 多い 40

図2 九州北部地方における向こう1か月間の天候の見通し

週別の天候・平均気温

	(1 週目) 9/25~10/1	(2 週目) 10/2~8	(3~4 週目) 10/9~22
天候	天気は数日の周期で変わりますが、高気圧に覆われやすいため、平年に比べて晴れの日が少ないでしょう。	天気は数日の周期で変わりますが、高気圧に覆われやすいため、平年に比べて晴れの日が少ないでしょう。	天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
平均気温	高い 見込み	高い 見込み	高い 見込み

【生育の見込み】10月の気温は高いと予想されています。早期作型では、生育が旺盛になった場合は2番花房の花芽分化の遅れが懸念されますので、確実に寒冷紗を設置してください。

10月の管理目標

- ・早期作型では、寒冷紗被覆により目標とする時期に2番花房を分化させる。
- ・普通作型では、生育が停滞しないように十分かん水する。
- ・病害虫防除に努め、うどんこ病、炭そ病、ハダニ類及びヨトウムシ類等の多発を防止する。

早期作型（9月15日定植）における10月10日の適切な葉幅

寒冷紗の有無	展開した最大葉の葉幅
有	8.5cm
無	7.5cm

これより大きくなると2番花房の分化が遅くなる可能性がある。また、これより極端に劣る場合は、無理な抑えはしない。葉幅により草勢を判断し、管理のしかたを変える。

草勢の判断の目安（早期作型）



最大葉の葉幅を計測する



10月10日の最大葉幅（定植後出葉した中で最も大きい葉の横の長さ）を測定する

1 かん水管理

① 定植～マルチ前

定植直後は、畝全体が湿り、通路に少し水が溜まる程度にし、活着までは畝の表面が乾かないように随時かん水を行う。

早期作型では、活着後に徐々にかん水量を控えるが、乾燥させすぎると生育停滞を招くので注意する。

普通作型では、かん水を十分に行い、生育不良にならないように注意する。

② マルチ後から果実肥大期

マルチ後～果実肥大期には要水量が増えるので、かん水量をやや多くする。特に、マルチ被覆直後はチップバーンを予防するために十分なかん水を行う。収穫期には、着色・食味を考慮して控えめのかん水とする。展葉が遅い場合には発根促進剤等を利用して発根を促す。

2 寒冷紗被覆

早期作型では、2番果房分化対策として9月28日から寒冷紗を被覆する。2番花房の分化を確認後、直ちに除去する。

3 株整理(下葉除去・どろ芽除去)

- 定植20日目頃から、傷んだ葉・枯葉を取り除く程度の葉かぎを実施する。
- マルチ前に葉数が4～5枚になるように葉かぎを行う。
- 葉かぎをしすぎると心葉の展開が急激に進み、2番花房の花芽分化に悪影響となるので極端な葉かぎは避ける。
- 葉かぎ後、ハダニ類やうどんこ病の防除を実施する。
- 不要な腋芽やクラウンから発生するどろ芽・ランナーは早めに除去する。

4 マルチ被覆

早期作型では、1番果房の出蕾が始まったら、花蕾を傷めないようにマルチをするが、10月末まではマルチのすそを上げておく。普通作型では、10月下旬がマルチ実施の目安となる。

- 早期作型では、マルチ被覆が早すぎて生育旺盛となった場合には、2番花房の分化が遅れる傾向がある。
- 根張りを促すため、最初はマルチのすそを畝の肩まで上げておき、地温が13℃以下になる10月末～11月上旬頃に全面被覆にし、地温確保を図る。
- 適期から遅れて定植したほ場や生育が悪いほ場では、生育促進のためにマルチは早めに行う。

5 追肥

- 早期作型では、原則として2番花房の花芽分化を確認した後、マルチ被覆前に施用する(10月中旬頃)。
- 草勢が旺盛(10月10日に最大葉幅8.5cm以上)で、マルチ被覆までに2番花房の分化が確認できない場合、緩効性肥料を用いできるだけ遅く追肥する。

- 普通作型では、マルチ被覆（10月下旬）の3～4日前に施用する。
- 活着不良等で生育が悪い場合は、液肥や葉面散布で生育促進を図る。

表1 【追肥量の目安】

肥料名	成分率 (%)	投入量 (kg/10a)	窒素量 (kg/10a)
あまおう専用肥料	8-6-3	60kg	4.8kg
新生いちご配合	6-6-4	80kg	4.8kg

6 溝堆肥の施用

- マルチ後～マルチのすそ閉じ前（10月下旬ころ）にうね溝に堆肥を施用する。
- 窒素分の施用が目的であるため、窒素を含む堆肥を施用する（豚糞堆肥 1～2t/10a）。
- 牛糞、バーク、モミガラ堆肥等窒素分が少ない堆肥を施用する場合は、追肥をうね溝に施用する（有機肥料等を30～40kg/10a）。

7 ビニル被覆

- ビニル被覆は平均気温が16℃程度となる頃に行う。

ビニル被覆は2番果房の花芽分化後に行うのが基本だが、既に1番果房が開花している場合で雨天が予測される場合は、速やかに被覆する。（花に強い雨があたると、奇形果の発生が懸念されるため）

- ビニル被覆後は、サイド・妻面を開放し、できるだけ気温が上がらないようにする。
- サイドや妻面は、最低温度が10℃を下回るようになったら、閉め込みを行う。
※ただし、閉めこみ後夜温が10℃を上回る日には換気を行い、果実の早熟や急激な株の立ち上がりを防止する。
- 草勢が弱い場合は、ビニル被覆を早め、やや高めの温度管理で生育促進を図る。

表2 果房の生育状況別温度管理の目安

頂果の状況	昼間	夜間	備考
開花～着色期	26～28℃	10℃	新葉の生育促進
着果期～白熟期	24～26℃	7～10℃	
白熟期～収穫期	20～24℃	5～7℃	収穫中は品質向上のため低めの管理

8 ジベレリン処理

- 1番果房出蕾直後～開花直前に、10ppmで5ml/株を株の中心部に散布する。
- 湿度が低いと効果が低くなりやすいので、かん水後に処理する。

ジベレリン使用した際には、忘れずに防除履歴に記帳してください。

9 ミツバチの導入と管理

- 巣箱の搬入は1番果房の開花7日前までに行い、環境に適応させておく。
- 基本的に巣箱はハウスの外に設置し、ハウスにミツバチの出入り口を設けておく。
- 一般に、ミツバチは20～23℃前後で最も活発に訪花活動し、14℃以下の低温や25℃以上の高温条件下ではほとんど訪花しない。
- 農薬の使用に当たっては、ミツバチへの影響日数に注意する。

全国的に交配用のミツバチが不足ぎみとなっています。ミツバチの管理等は養蜂農家と十分に相談し、健全なミツバチでの確実な交配を心がけて下さい。

10 病害虫防除

- 定植後の炭そ病の発生が懸念されるので、防除を実施するとともに、発生を認めたら除去・補植を行う。
- 8月の気温が低かったためうどんこ病の発生が懸念されるので、マルチ被覆前後の防除を徹底する。
- 去年は、定植後にハダニ類が発生し、春先まで発生が続いたので葉かぎ後に防除を徹底する。また殺卵効果のある殺ダニ剤と組み合わせて散布すると効果が見込める。
- ヨトウムシ類等やアザミウマ類（スリップス類）も増える時期なので早めの防除を心がける。
- 去年、一部のハウスでコナジラミ類による被害が見られた。コナジラミ類の発生源が近くにある場合には0.8～1mm目合の防虫ネットをサイドや妻面に設置する。

11 親株の管理

- 専用親株とする苗には、ポットに施肥し、炭そ病やハダニ類を定期的に防除する。
- 本田の栽培面積に応じて、十分な親株本数を定植する（本田栽培面積10aあたり600～800株）。
- 炭そ病、疫病及び萎黄病が発生していない健全な苗を使用する。
- 年内に生育を旺盛にした株は、春先のランナー発生数が多くなるので、できるだけ早く（11月末まで）定植する。
- 定植前に親株を冷蔵処理（5℃以下の低温に20日間程度）を行うと、春先のランナー発生が早くなる。
- 親株の数が不足する場合や、親株用の苗に炭そ病の発生が多い場合は、ハウスビニル被覆後の本田の株から発生した秋冬ランナーを利用する。
※ハウスビニル被覆前に発生したランナーは降雨により炭そ病に感染している可能性が高いため、必ずハウスビニル被覆後に発生したランナーから採苗する。

～「慣れ」と「油断」が事故を招きます～
”安全”な農作業と農薬使用を徹底しましょう！

トピックス「天敵を活用し、ハダニ類防除を徹底しましょう！」

令和2年産では、多くのほ場で定植後にハダニ類が多発し、春先まで発生が続いたところもありました。ハダニ類の天敵を使用したほ場では、効果的にハダニ類を抑えた事例がありました。これらの事例を紹介しますので、天敵を利用したハダニ類防除の参考としてください。

(1) 成功事例 (図3)

<カブリダニ類のスケジュール放飼により防除した例 (A) >

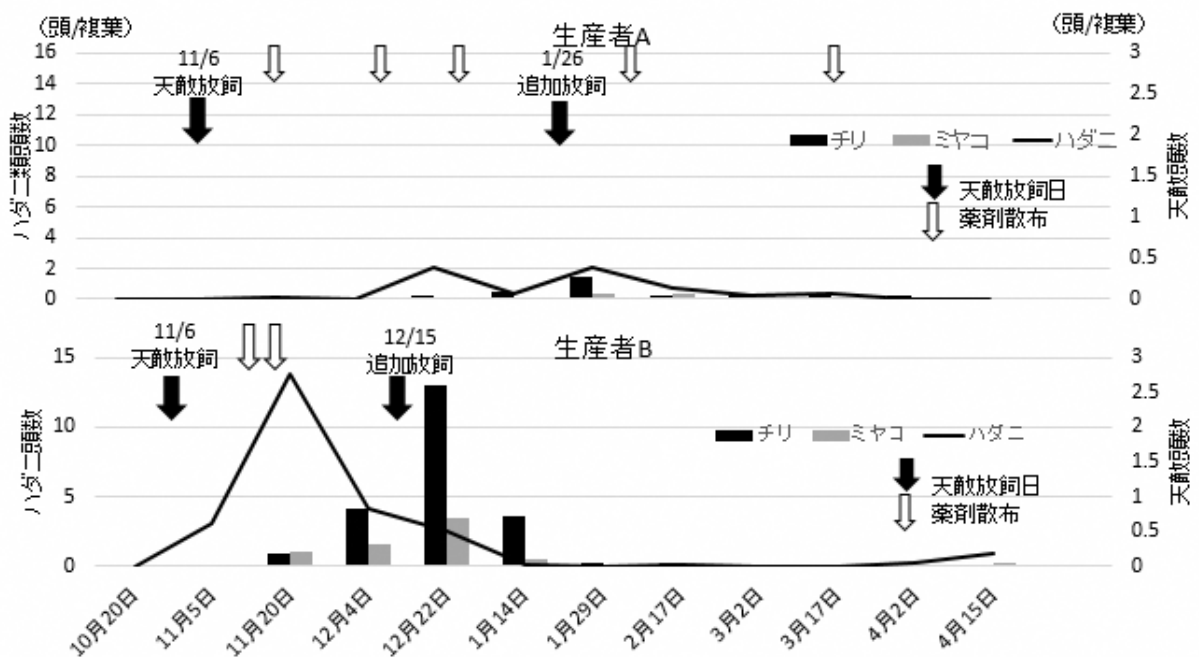
天敵放飼前に天敵に影響が少ない薬剤散布によりハダニ類の密度を下げた後、11月上旬に天敵を放飼した。その後も定期的に天敵に影響がない薬剤による防除を行った。さらに、温度が上がってハダニ類が増え始める前に天敵の追加放飼を行った。

→スポット的にハダニ類の発生が見られたが、周囲に広がることなく抑えることができた。

<天敵放飼時に既にハダニ類が発生していたが、多発時の集中防除により防除できた事例：(B) >

1回目の放飼時には、既にハダニ類が発生しており、天敵放飼後にハダニ類が多発した。そこで、速やかに天敵に影響の少ない薬剤で集中的に防除を行い、ハダニ類の密度を下げた。その後すぐに天敵の追加放飼を行った。

→一時的にハダニ類が多発したが、薬剤によりダニ類の密度を下げる事ができた。その後、早めに追加放飼したことで、天敵が急増し、ハダニ類の発生を抑えることができた。



※天敵放飼量: 1回目 チリカブリダニ 6000頭/10a、ミヤコカブリダニ 5000頭/10a 2回目 チリカブリダニ 6000頭/10a

図3 天敵を利用したハダニ類防除成功事例 (令和2年産 南筑後普及指導センター調査)

(2) 天敵による防除を成功させるポイント

- ① 天敵導入前にハダニ類を徹底的に防除する (ゼロ放飼)
- ② 10月~11月上旬のなるべく早い時期に天敵を導入する
- ③ 天敵導入後は、影響の少ない薬剤を利用する
- ④ 天敵放飼後にハダニ類が多発した場合には、速やかに効果が高い薬剤を連続使用してハダニ類の密度を下げる。
- ⑤ 天敵の増殖には、適度な湿度が必要なため、ほ場が乾燥しすぎないように管理する。

本資料中の農薬については、令和3年9月8日現在の登録内容に基づいています。